

## モンゴル初中等教育機関での授業実践

### —現状調査を踏まえたチーム・ティーチングの試み—

高嶋幸太（早稲田大学）

#### Classroom practice in primary and secondary schools in Mongolia: An attempt at team teaching on the basis of current state survey

Kota Takashima (Waseda University)

キーワード： モンゴルの日本語教育、初中等教育、ニーズ分析、チーム・ティーチング

Keywords： Japanese language education in Mongolia, primary and secondary education, needs analysis, team teaching

#### SUMMARY

The author conducted a survey about Japan and Japanese language in Mongolia. Reflecting findings, (1) providing information about Japan, (2) increasing opportunities to speak and listen to Japanese, (3) enjoyable kanji instruction were set up as a policy of team teaching. From findings and practice, the importance of “opportunities to speak and listen to Japanese”, “learning enjoyably”, and “grasping interest of the learner” became clear.

#### 1. はじめに

2010年4月から2年間、青年海外協力隊の日本語教師として、モンゴルのウランバートル市教育局に派遣され、日本人日本語教師が存在しない市内の初中等公立教育機関を巡回指導していた筆者は、モンゴルの初中等教育機関における日本語教育の現状について明らかにし、モンゴル人教師とのチーム・ティーチングにおいて効果的な日本語指導の仕方を探るため、日本・日本語の授業に関する調査を実施した。本稿は、その調査と、調査結果に基づいた授業実践を記した実践報告である。

#### 2. モンゴルの基本情報

##### 2.1 初中等教育機関での日本語教育

国際交流基金日本語教育国別情報（2011）によると、2007年度より初中等教育機関では4年生から英語が第一必修外国語として、7～9年生の3年間はロシア語が第二必修外国語として教えられており、学校によっては選択または選択必修の外国語科目として、日本語や中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語、ロシア語などが教えられて

いる。モンゴルでは1990年から初中等教育レベルで日本語教育が取り入れられ、それ以降、徐々に学校数が増えていったのだが、バヤルマー（2005）は、モンゴルが民主化してから日本語学習に関心が持たれ、現在では外国語学習においては英語に次いで第2位の学習者数であるが、日本語学習者の増加が今後も続くかどうかはわからないと述べている。

ウランバートル市では、2012年3月の時点で、国公立学校9校、私立学校13校、計21校の初中等教育機関<sup>1</sup>で日本語が教えられていたが、宮前（2009）によれば、ウランバートル市の初中等教育機関31校で日本語を教えられているとあるとあり、その時と比べると大分減っていることがわかる。海外日本語教育機関調査結果（2009、国際交流基金日本語教育国別情報（2011）の引用による）にはモンゴルの日本語学習者数は11,604人とあるが、そのうち初中等教育機関の学習者は5,667人と全体の約49%にあたる。モンゴルの日本語の授業で使われている教科書は『みんなの日本語』『ひろこさんのたのしいにほんご』、有志作成のモンゴル独自の教科書である『日本語を学ぼう』『できるよ』など、学校によって様々であるが、使用率で言えば、『みんなの日本語』が一番高く、半数以上の学校で使われていた。それ以外にも学習開始学年、1週間の授業時間も学校によって大きく異なり、筆者の知る限り早い学校では1年生<sup>2</sup>から教えている学校もあれば、日本で言うところの中学1年生である7年生から教え始める学校もあり、学校の裁量によってそれらは大きく異なる。

## 2.2 初中等教育機関と高等教育機関との連関

初中等教育機関と高等教育機関との連関は薄い。例えば、初中等教育機関で初中級レベルまで学習した生徒が、高等教育機関で日本語のコースを選択する場合、ゼロ初級からのスタートとなる。その為、高校までは日本語を勉強して、大学では経済を選択するといった学習者も見えてきた。こういったことから、初中等・高等教育間での連関はモンゴルの日本語教育における今後の課題の一つと言えるであろう。

## 2.3 外国語教育スタンダード

国際交流基金日本語教育国別情報（2011）によると、モンゴル教育文化科学省は2005年に今後の外国語教育の指針として「外国語教育新スタンダード」を発表した。このスタンダードで重きを置いているのは「学習者中心」「実用的」「意味・場面の重視」「帰納的」「コミュニカティブ」の5つである。また、外国語教育スタンダード（2005, p. 10）によると、外国語教育の目的を、「社会関係において自己の考えを自由に表現し、相互理解するのに必要な外国語教育レベルがあり、外国語教育の目的はその要求に応え得る包括的技能を有する市民の育成にある」としている。現場に関して言うと、各学校の日本語教育水準や、教師の教授経験は様々であり、モンゴルの外国語教育スタンダードで強く叫ばれている「学習者中心」や「コミュニカティブ」な授業を実践している学校もあれば、教科書をそのまま板書し写させるという知識偏重型授業も見られた。

## 2.4 JF 日本語教育スタンダード

国際交流基金の助成を受け、2012年9月から、モンゴルの初中等教育機関2校がモデル校として、試験的に『JFスタンダード』を取り入れて、授業を行っている。具体的には、従来の文法積み上げ型の授業から、本スタンダードが掲げているような、「JFスタンダードの木」と「Can-Do」をベースとした授業、そして「ポートフォリオ」を活用した授業等が行われている。昨今、モンゴルでは当スタンダードへの関心が非常に高まっており、今後、JFスタンダードを取り入れる学校は多くなるのではないかと予想される。

### 3. 調査について

2011年2月モンゴル人日本語教師了承の下、日本・日本語の授業に関する質問紙調査を実施した。調査対象者は、筆者の巡回指導先であった2校、A学校74人とB学校78人、計152人の中高生である。この2校は、どちらも初中高一貫の外国語教育特化学校で、モンゴル・ウランバートル市の日本語教育の特徴が顕著に表れるのではないかと考えた。また、A学校は1年生の3学期から日本語の授業が始まり、B学校では7年生から始まるため、調査対象者が揃えられるよう、中高生に調査対象を絞った。

A学校についてだが、日本語指導開始年度は1992年と歴史がある。教科書は、初中等部では有志作成の教科書『日本語を学ぼう』で、高等部は『みんなの日本語』を使用している。モンゴル人の日本語教師は2名いて、調査時の2011年では、S先生は教授歴5年、L先生は4年であった。

B学校は、2004年から日本語を教え始めた学校で、使用教科書は全ての学年において『みんなの日本語』である。こちらもモンゴル人日本語教師は2名いて、調査時の2011年では、C先生は教授歴10年、T先生は6年であった。

表1 調査対象者の情報

		性別 (人)				学年 (人)				
		男	女	無記入	計	7年	8年	9年	10年	11年
A 学 校	人数	21人	37人	16人	74人	14人	13人	15人	25人	7人
	割合	28%	50%	22%		19%	18%	20%	34%	9%
B 学 校	人数	16人	44人	18人	78人	24人	*	32人	*	22人
	割合	21%	56%	23%		31%		41%		28%
全 体	人数	37人	81人	34人	152人	39人	13人	47人	25人	29人
	割合	25%	53%	22%		26%	9%	31%	16%	19%

\*12年生制度の移行期間で8年生はおらず、10年生は授業の日程上、調査できなかった。

### 4. 調査結果と考察

各質問項目の調査結果と考察をする。考察の方法であるが、先行研究、現地の日本語教師へのインタビュー調査、筆者自身の見聞を基に行う。

#### 4.1 日本へ行きたいか

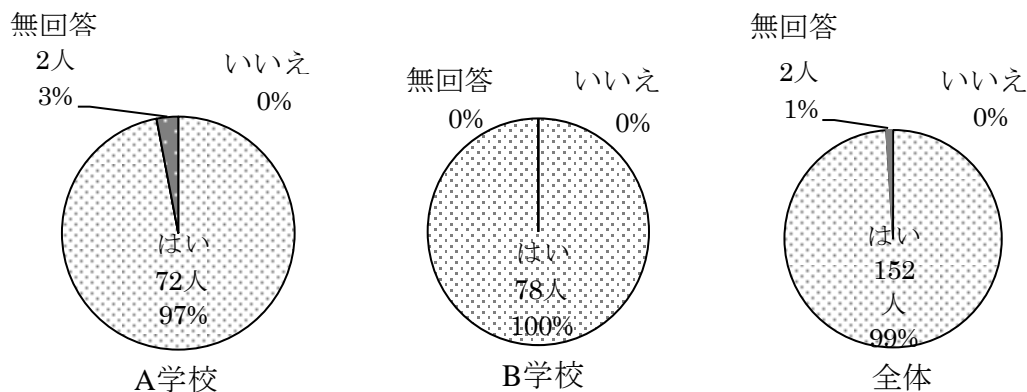


図1 日本へ行きたいか

A学校、B学校、どちらも「行きたい」という回答がほぼ100%という結果が出た。2校の4名のモンゴル人教師も「日本という国への興味の表れではないか」と話していた。ちなみにA学校では、訪日経験者は5名で、B学校では6名であった。モンゴルでは、日本に行くチャンスが多々あり、公的なプログラムで言えば、2011年度まで続けられていたJENESYSプログラムや、大使館主催の訪日研修プログラムなどがあり、民間のプログラムでも日本に行く機会が与えられていた。こういった日本に対する近さが、このような結果に繋がったのではないかと考察する。

#### 4.2 日本について有する知識

表2 日本について何を知っているか (選択式・複数選択可)

		文化・ 伝統	ポップ・カ ルチャー	生活	食べ物	ハイテク	礼儀・ 丁寧さ	地理	ほか
A 学 校	人数	43人	50人	30人	51人	37人	42人	30人	8人
	割合	58%	68%	41%	69%	50%	57%	41%	11%
B 学 校	人数	49人	54人	38人	50人	39人	49人	27人	8人
	割合	63%	69%	49%	64%	50%	63%	35%	10%
全 体	人数	92人	104人	68人	101人	76人	91人	57人	16人
	割合	61%	68%	45%	66%	50%	60%	38%	11%

「ポップ・カルチャー」「食べ物」「文化・伝統」「礼儀・丁寧さ」の回答が多かつ

た。これに対し A 学校の S 先生は「例えば三月三日なら雛祭りなど祝日についてよく話す」と言っていた。また同校の L 先生は「ドラゴンボールやナルトなどのマンガがモンゴルでは人気で、その影響が強い」と答え、さらに『生活』の回答の割合が少ないので、国際交流基金の写真パネルバンクなどを使って今後教えていきたい」と話していた。B 学校では、C 先生は「授業中あまり日本について話していない」と言っていたのに対し、T 先生は「時々話す」と言っていた。また、ウランバートル市内には、日本料理レストランや日本食品を輸入しているスーパーなどがあり、日本食品は身近な存在となっていると言えるだろう。「ほか」には「映画」という回答が多かった。

#### 4.3 日本語学習理由

表 3 日本語学習理由（選択式・複数選択可）

		ポップカルチャー	異文化に興味がある	留学したい	仕事で使いたい	選べなかった	日本・日本語が好きだから	友達を作りたい	視野を広げたい	いい成績をとりたい	ほか
A 学校	人数	6 人	20 人	61 人	39 人	6 人	44 人	24 人	35 人	22 人	11 人
	割合	8%	27%	82%	53%	8%	59%	32%	47%	30%	15%
B 学校	人数	9 人	22 人	47 人	46 人	4 人	46 人	17 人	32 人	21 人	9 人
	割合	12%	28%	60%	59%	5%	59%	22%	41%	27%	12%
全体	人数	15 人	42 人	108 人	85 人	10 人	90 人	41 人	67 人	43 人	20 人
	割合	10%	28%	71%	56%	7%	59%	27%	44%	28%	13%

中・高等部の学習者は「留学したいから」「仕事で使いたいから」という明確な理由が多かった。留学への関心の高さに関して、B 学校の C 先生は「日本はモンゴルより勉強する環境が整っていると学習者が考えているのでは」と考察していた。一方で、「日本・日本語が好きだから」という回答も多かった。今回の調査では項目になかったのだが、A 学校の S 先生は「両親からの勧めで日本語を勉強する学習者も多い」と話していた。これは、日本語を将来のキャリアに役立ててほしいと期待している両親が多い現れだともいえるだろう。森（2006）の調査では、S 高校、N 学校高等部、M 大学の 3 校のモンゴル人日本語学習者 290 人の学習動機を調査した結果、37 項目中、上位 3 位は「視野を広げてくれるから」「文化人になりたいから」「日本で勉強したいから」であった。海外日本語教育機関調査結果（2009、国際交流基金日本語教育国別

情報（2011）の引用による）によると、初中等教育機関の学習目的の上位3位は「日本語そのものへの興味」「コミュニケーション」「日本留学」であった。いずれの調査でも留学という回答が多く、国際交流基金日本語教育国別情報（2011）でも述べられているように「日本学生支援機構（以下、JASSO）の日本留学試験がモンゴルでも実施されるようになったことから、私費留学への挑戦が容易になった」。また、JASSO調査（2009、国際交流基金日本語教育国別情報（2011）の引用による）ではモンゴルは日本への人口比留学率が世界第1位とあり、モンゴル人学習者の日本留学への関心の高さがうかがえる。「その他」の回答には、「歴史に興味があって」「日本は発展しているから」等があった。

#### 4.4 日本語の困難度

表4 日本語の困難度の平均（5段階評定で、5がとても難しい、1がとても易しい）

		総合	話す	聞く	書く	読む
A 学 校	平均	3.12	3.23	3.28	2.24	2.58
	標準偏差	0.81	0.88	1.03	1.07	1.09
B 学 校	平均	2.99	2.88	2.91	2.27	2.28
	標準偏差	1.88	1.21	1.24	1.32	1.25
全 体	平均	3.05	3.05	3.09	2.26	2.43
	標準偏差	1.46	1.07	1.15	1.20	1.18

日本語そのものの総合的困難度は平均は約3と中程度だが、「話す・聞く」の困難度は「読む・聞く」の困難度より高かった。A学校のL先生は「学習者は話したり聞いたりするのは恥ずかしいと感じるようで、上の学年に行けばいくほど、その傾向は強くなる」と話していた。「話す」「聞く」「読む」の三項目で、A学校の平均がB学校のそれより高いが、どの項目でも標準偏差はB学校の方が高く、B学校の回答にはばらつきが見られた。

#### 4.5 日本語学習で困難な点

「漢字」が圧倒的に多く、それに続いて「文法」「単語」「助詞」などの項目が高かった。モンゴルでは、キリル文字が使用されており、形が全く違う漢字は学習するのが困難だと思われる。A学校の二人の先生は「読みが複数あるのも難しくさせている」と話していた。助詞に関して、A学校のS先生は「モンゴル語にも助詞はあるのだが、日本語と完全に対応しているわけではない」と言っており、そういった理由から困難にさせているのではないかと考えられる。語順など日本語とモンゴル語で同じ部分もあるのだが、助詞など細かいところでは違う部分もある。例えば、モンゴル語の与格「-д (-т)」は、日本語では「に」や「で」などと訳される。そういった部分は学習

者にとって難しいのかもしれない。

表 5 日本語学習で難しい点（選択式・複数回答可）

		発音	活用	挨拶	かな	カナ	漢字	文法	数字	単語	助詞	ほか
A 学校	人数	8人	13人	5人	0人	3人	60人	31人	10人	14人	24人	2人
	割合	11%	18%	7%	0%	4%	81%	42%	14%	19%	32%	3%
B 学校	人数	8人	3人	4人	0人	7人	67人	17人	7人	24人	13人	4人
	割合	10%	4%	5%	0%	9%	86%	22%	9%	31%	17%	5%
全 体	人数	16人	16人	9人	0人	10人	127人	48人	17人	38人	37人	6人
	割合	11%	11%	6%	0%	7%	84%	32%	11%	25%	24%	4%

#### 4.6 日本語学習で容易な点

表 6 日本語学習で易しい点（選択式・複数選択可）

		発音	活用	挨拶	かな	カナ	漢字	文法	数字	単語	助詞	ほか
A 学校	人数	31人	38人	28人	65人	50人	4人	13人	40人	31人	13人	0人
	割合	42%	51%	38%	88%	68%	5%	18%	54%	42%	18%	0
B 学校	人数	36人	26人	32人	69人	49人	3人	13人	34人	20人	13人	1人
	割合	46%	33%	41%	88%	63%	4%	17%	44%	26%	17%	1%
全 体	人数	67人	64人	60人	134人	99人	7人	26人	74人	51人	26人	1人
	割合	44%	42%	39%	88%	65%	5%	17%	49%	34%	17%	1%

「ひらがな」や「カタカナ」「挨拶」「数字」などは一度覚えてしまえば、学習者にとって易しい項目のようである。また、発音に関してだが、モンゴル語は日本語より母音の数も多く発声方法も複雑なため、日本人にとって発音は難しいが、モンゴル人にとっては容易だと思われる。「活用」の割合も高いがこれに対して、A学校のL先生は「学習者の定着はよくない」と話しており、学習者が容易と考えている項目でも、教師はしっかり定着していないと捉えており、認識にズレがある。

#### 4.7 授業の満足度

A学校、B学校、どちらの学校とも平均は4以上で標準偏差も1未満であり、学習者は日本語の授業に概ね満足しているようである。A学校の先生、B学校の先生とも

に、学習者が楽しんで日本語を学べるような活動や教材を試してみようとする熱意があり、そういった先生の熱意が授業に反映されている結果ではないかと考えられる。A 学校、B 学校、両校の外国語教育特化学校では、学習者が満足できるような日本語教育を提供していると言えるだろう。

表7 授業の満足度の平均（5段階評定で、5がとても満足、1がとても不満）

A学校	平均	4.39
	標準偏差	0.86
B学校	平均	4.35
	標準偏差	0.93
全体	平均	4.37
	標準偏差	0.90

#### 4.8 良い授業の条件

表8 良い授業とはどんな授業か（選択式・複数選択可）

		アクティビティ	歌	文化	翻訳	話す	聞く	書く	読む	ゆっくり教える	早く教える	先生が日本語を使う	カード・絵を使う	ほか
A学校	人数	31人	32人	30人	34人	51人	36人	14人	29人	4人	9人	29人	34人	5人
	割合	42%	43%	41%	46%	69%	49%	19%	39%	5%	12%	39%	46%	7%
B学校	人数	33人	30人	32人	32人	42人	42人	29人	36人	9人	9人	19人	28人	3人
	割合	42%	38%	41%	41%	54%	54%	37%	46%	12%	12%	24%	36%	4%
全体	人数	64人	62人	62人	66人	93人	78人	43人	65人	13人	18人	48人	62人	8人
	割合	42%	41%	41%	43%	61%	51%	28%	43%	9%	12%	32%	41%	5%

たくさん話したり聞いたりする授業が、学習者にとって良い授業であると考えられており、日本文化や日本の歌が学べる授業も人気のようである。翻訳も多いが、これに対し A 学校の S 先生、L 先生、二人とも「翻訳をしていると新出単語が出てきて、新たにいろいろな単語を覚えられるからではないか」と考察していた。また、カードや絵を多く使うことに対して S 先生は「見てわかりやすいから」と話していた。アク



ティビティに関しては、B 学校の C 先生は「授業でアクティビティを入れるように心掛けています」と話していた。「その他」には、「楽しい授業」「会話のある授業」などがあった。

#### 4.9 モンゴル人教師へのインタビュー

インタビュー調査で日本語を教えていて大変なこととして、A 学校の S 先生は「ある文型を教えても、定着が悪く、次の文型に進めない場合がある」と言っていた。確かに、宿題をしてこない学習者や休みがちな学習者がいて、前時の授業を理解していないため、次の授業内容がわからないという場面を筆者も多々見てきた。同質問に L 先生は「転校生が来ると、レベル差が生じてしまうのが問題」と話していた。先に述べたようにモンゴルでは、日本語のカリキュラムが学校の裁量に任されているため、日本語学習の進度は学校によって全く違う。そのため、教師は転校生に対して空き時間に補習をしたりしなければならない。

最後に、四名の教師に対して自身が目指している授業について尋ねると、A 学校の S 先生は「コミュニケーションが多く、難しい文型も分かりやすく教える授業をしたい」と語っており、L 先生は「四技能が一緒に伸ばせる授業」と答えていた。B 学校の C 先生は「アクティビティをたくさんする授業」、T 先生は「たくさん日本語を話したり、聞いたりする授業をしたい」と答えていた。

#### 4.10 調査結果のまとめ

本調査から、全体傾向として以下の四点が指摘できる。第一に、日本について有する知識にばらつきがあるということ。特に、日本人の生活、地理に関する回答率は他と比べ少なかった。第二に、留学という目的をもって日本語を学習している生徒が七割以上で圧倒的多数だったということ。第三に、「話す」「聞く」は「読む」「書く」より難しく感じられており、学習者は授業でもっと「話す」「聞く」活動を望んでいるのではないかということ。これは、普段の授業であまり「話す」「聞く」練習が少ないからなのではないかと考えられる。最後に、漢字学習は難しいと感じている学習者が非常に多いということである。

### 5. 授業実践

調査結果を踏まえ、巡回先のモンゴル人教師と話し合い、チーム・ティーチングの指針として、それぞれ一話完結型で①生教材を通して日本に関する情報を提供する、②「話す」「聞く」機会を増やす、③楽しい漢字指導を行うという三つを設定した。以下に、チーム・ティーチングを行った A 学校、B 学校での授業実践を紹介する。

#### 5.1 ショー・アンド・テル

これは、日本に関する情報を提供することを目的に行われた活動である。「日本人と話しましょう」と名付けられ、毎回授業時間を少しもらい、著者があるトピックに関連する写真などを見せながら、それを説明するという活動を行った。説明後は、必ず学習者から日本語で質問させるようにし、説明を聞いてから話すことを促した。トピ

ックには、調査結果を踏まえ、学習者が興味・関心を示しそうなものを中心に選んだ。例えば、「モンゴルと日本のお正月」「日本の中高生」「日本の教育」「日本料理」「日本の家族」などである。

A 学校で実践した際、最初のうちは、学習者にとってどのように質問すればいいのか難しかったようで、なかなか質問が出なかった。そこで B 学校では、モンゴル人の日本語教師が私に質問をして、どのような質問でもいいという見本を見せた。B 学校では、質問例があったこともあり、最初のうちから質問が学習者から発せられた。回を重ねるごとに、A 学校、B 学校ともに質問する学習者は増え、特に、「日本の中高生」や「日本の教育」などのトピックでは、学習者から多くのことを聞かれ、予定時間より大幅に超過し、授業時間の半分<sup>3</sup>を費やした。これは同世代の日本人に強い関心があったことに加え、留学に興味を持っている学習者が多かったことも起因していると思われる。興味のあるトピックでは、もっと聞きたい、もっと知りたい、という感情を自然と起こさせることができるので、学習者のモチベーションを上げるために、トピックの選定は非常に重要な要因であると感じた。

## 5.2 ストーリー・テリング

「話す」「聞く」技能を伸ばすことを目的とした活動である。使用教材として、世界各国の観光名所や名物料理などの写真を一枚の紙に張りつけ、ストーリー・テリングシートを作成した。ペアになりこのシートを用いて、片方が「旅行に行く」という設定の下、旅行について話し、もう片方が聞いて質問する、という活動を行った。

A 学校の 9 年生の授業で「～予定です」の文型をモンゴル人教師が導入、基本練習した後に、このシートを使い、話し手・聞き手になって旅行の予定についてやり取りするというペア・ワークをした。学習者の活動中の様子だが、初体験の活動ということもあったためか、慣れていない様子で、なかなか自分の力で話すということに苦労している感じであった。他の学習項目の際も何度か本教材を使用するうちに、学習者は慣れていったようで、知っている単語や文型を使って必死に伝えようとする姿が見られた。初めてこの活動を紹介した際、海外のシートを使って活動をしてしまったのが学習者を苦労させた原因と思われる。この活動をする際は、話すことへの下地作りとして、まずは見慣れている自国のこと、つまりモンゴルの写真が貼られたシートから始めたらより活動しやすかったのではないかと思われる。

## 5.3 フォト・ランゲージ

まずペアを作り、X と Y を決め、X はある一枚のポストカードの写真（イラスト）を見て覚え、それを Y に日本語を使って伝える。そして Y は質問をしながら、どんな絵だったかを考え、最後に X が見たのはどんな写真（イラスト）だったかを、Y が報告するという活動である。日本語の力の問題もあり、中学生でこれをする際は、Y は似たような絵の中から X が見た絵を選ぶという確認方法を取ったが、高校生では日本語で発表するという形式を取った。

A 学校、B 学校ともに著者が取り入れた活動の中で、一番評価が良く、実施してみて、モンゴル人教師・学習者双方から「非常に有意義な活動だった」という感想を口

にしていた。L 先生が「上の学年は日本語で話すことを恥ずかしがる」と話していたのに対し、活動中、A 学校の高校生でも積極的に日本語を使おうという姿が見受けられた。この活動で学習者が積極的に日本語を使おうとした要因として、話し手と聞き手が情報差を埋めていき、最終的にはどんな写真（イラスト）だったか当てるといように、目的が明白でかつゲーム的要素もあったことが考えられる。また、モンゴルでは、各学校に必ずしもコピー機やメディア機材があるというわけではないので、これらの機材を必要としないこの活動は、モンゴルの現場では非常に取り入れやすい活動だったようである。

#### 5.4 漢字教材

「84%の学習者は漢字が難しいと考えている」という結果を受け、伊東他（1994）を参考にし、「楽しい漢字指導」のための教材を作成した。例えば、象形文字の成り立ちカードである。これは漢字を初めて学習する学習者のために、「ものの形から漢字はできているのか」と気付かせるための教材で、モンゴル人教師に紹介し、教材を配った。後日、C 先生は「とても分かりやすい教材だった」と話していた。

他にも、漢字クイズも作成した。正方形の紙を用意し、横方向に 10 か所切り込みを入れ、その紙の中に、漢字を一文字書いた紙を入れ、一枚ずつ切り込みをめくっていき、何という漢字か当てる活動である。この教材の狙いは、漢字の部首や音符などのパーツに注目させ、形声文字など漢字の構造に気付かせることにある。A 学校の 7 年生のクラスでグループ対抗の漢字クイズを行ったのだが、学習者は手のひらに漢字を書いたりし、何の漢字か当てるのに必死になっていた。

初中等教育段階の文字指導では特に、ただ文字を書いて覚えるのではなく、身体や頭を使った活動が、有効なのではないかと考えられる。

#### 6. まとめ

本稿の調査と授業実践を基に、筆者がモンゴル初中等教育機関の日本語の授業で重要だと感じた点を、三点にまとめる。

第一に、「話す・聞く」ということである。調査の結果から、学習者は「話す」「聞く」は「読む」「書く」より難しいと考えており、授業中日本語をたくさん話したり聞いたりする授業が良い授業だとする傾向が見られた。日本国外で日本語を学ぶ場合、国内で学ぶのとは違い、教室から一步外へ出ると、日本人の友人などがいない限り、日本語で話したり聞いたりする機会が格段と減ってしまう。学習者に話したり聞いたりする機会を提供するためにも、授業中「話す」「聞く」ができるだけ多くなるような授業設計が必要である。また、日本語の授業以外でも日本語が使えるような場面があると、「話す・聞く」機会を増やす要因となり、学習者にとって大変効果的であろう。これに対して例えば、現地の邦人に協力してもらい、ビジター・セッションをするのも一つの手だと考えられる。

第二に、「楽しく」という観点である。初中等教育機関で日本語を学んでもらう上で必要不可欠なのは、学習者が日本語を「楽しく」学べるか、ということだろう。モンゴル語の表記法であるキリル文字もまだ完全に定着していない小学校低学年の児童が、

モンゴル語に加え外国語を学ぶといった場合、外国語学習がつまらなければ、その授業の時間は苦痛以外の何ものでもないだろう。まずは、「日本語を学ぶのが楽しい」と学習者に思ってもらえるような授業設計が必要である。例えば、4.8章の良い授業の条件として四割以上の学習者が挙げていた、アクティビティを取り入れる、日本の歌を歌う、日本文化について学べる、絵・カードを使う、などが考えられる。また、インタビューでS先生も言っていたように、学習者が難しいと感じていることを、分かりやすく楽しく教える、というのも非常に重要である。

最後に、「学習者の興味・関心」という点である。教師は学習者が何に興味・関心を持っているかを熟知する必要があるであろう。5.1章でも述べたように、学習者は「日本の中高生」や「日本の教育」などのトピックに非常に興味を持っていた。学習者自身が興味あることは、もっと聞いたり質問したりしたいという気持ちを自然と生み出すことができる。その気持ちが日本語を使用する機会を増やす要因にもなっていくことであろう。そのためにも、教師は学習者の興味・関心をきちんと把握し、それらを活かして学習者のモチベーションを高めるように心掛けるべきである。

本稿ではモンゴルの初中等教育機関における実践を記したが、海外の、特に初中等教育機関に焦点を当てた論文はまだまだ少ない。今後、様々な国や地域における初中等教育機関での日本語教育について取り上げられ、議論が積み重ねられていく必要があるだろう。

## 謝辞

調査に協力して下さった巡回校の学習者、先生各位に深く感謝申し上げます。

## 注

- 1 モンゴルでは小中高一貫校が一般的で、12年制教育である。
- 2 モンゴルは9月から新年度が開始する4学期制である。
- 3 モンゴルの初中等教育機関の1コマは基本的に40分である。

## 参考文献

- 伊東信夫他 (1994). 『漢字はみんな、カルタで学べる』. 太郎次郎社  
国際交流基金 (2010). 『JF日本語教育スタンダード2010』. 2013年9月22日検索.  
[http://jfstandard.jp/pdf/jfs2010\\_all.pdf](http://jfstandard.jp/pdf/jfs2010_all.pdf).  
国際交流基金 (2011). 『日本語教育国別情報2011年度モンゴル』. 2013年10月4日検索.  
<http://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/country/2011/mongolia.html>.  
ナイダン・バヤルマー (2005). 「モンゴルにおける日本語教育」. 『比較日本学研究センター研究年報』 創刊号、145-149.  
森まどか (2006). 「モンゴル人日本語学習者の日本語学習動機に関する分析」. 『語文と教育』 20、30-40.  
宮前奈央美 (2009). 「モンゴルの日本語教育」. 『留学交流』 2009年5月号、22-25.  
モンゴル国教育・文化・科学省 (2005). 『外国語教育新スタンダード』